

〔論文〕

オペレッタ創作活動におけるグループ活動について —学生の自己評価アンケートを中心に—

魚住美智子・村上 佑介

1 目的

筆者は保育者を目指す学生を対象に、20数年、オペレッタ創作活動を行ってきた。現在は、2年次後期の保育表現技術（総合表現の応用）という科目でオペレッタ創作活動を行っている。この活動は、「保育に必要な知識や技術などを体験を通して修学する」と「人間関係の構築」をねらいとして、グループを組み、オペレッタ作品を創作する活動である。将来、保育現場に就く学生が大勢を占めることを考慮すると、このような活動を通して「表現力を磨くこと」や「コミュニケーション能力の向上」を目指すことは必須である。

上述のねらいを遂行するには、グループ活動の充実が不可欠である。ただ、近年グループ活動が成立しにくい傾向にある。その要因にはスマートフォンやSNSの普及により、対人関係が希薄になっていることなどが考えられるが、集団で一つの作品を作り上げるこの活動では、グループ活動の充実度の高低が、作品の完成度に影響を与える。これを受け本研究では、アンケートを中心にグループ活動の実態を精査し、今後のオペレッタ創作活動への課題や援助などを考えていくことを目的とした。

2 調査方法

本研究では、2015年度の総合保育学科124名の学生の自作品に対する自己評価アンケートを基に、グループ活動の実態や課題を考察する。

グループは全12班で、1班の構成人数は8～14名である。グループ編成は、これまでの経験上、適切に運営を行えるだろうと思われた10名を原則とし、学生の自主性に任せたが、人数に多少が生じたため教員側で調整を行った。また、リーダーを含む各人の役割も各班に任せた。

オペレッタ発表後に行ったオペレッタ作品・自己評価アンケートの項目は、★「全体の印象」、①「構成（流れ）」、②「台詞」、③「動き」、④「ダンス」、⑤「音楽」、⑥「造形」、⑦「衣装」、⑧「グループ活動」、「創作活動及び発表を体験しての感想（自由記述）」である。★の項目から⑧までの項目は、5段階評価の選択式とし、各項目に自由記述欄を設けた。

本研究では、グループ活動に視点を絞って検討していくため、★「全体の印象」、⑧「グループ活動」、「創作活動及び発表を体験しての感想（自由記述）」の3つの項目を取りあげる。

3 調査結果と考察

(1) 「全体の印象」と「グループ活動」の5段階評価の集計結果と関係

各班の「全体の印象」及び「グループ活動」の平均値を表にすると以下のようになった(表1)。

「全体の印象」の項目は「発表の達成度」の評価、「グループ活動」の項目は「グループ活動の充実度」の評価と捉えることができる。この二項目に関する各グループの数値を見ていくと、「全体の印象」の評価が最も高かったグループは、4.3点(10班)で、最も低かったグループは2.5点(2、7、12班)であった。一方「グループ活動」については、4.2点(5、9班)が最も高く、2.1点(7班)が最も低かった。また、各項目に対する全グループの平均値は、「全体の印象」が3.4点、「グループ活動」が3.5点であった。どちらも3点を越えていることから、学生が自分たちの発表に一定の評価を行っていると言えるだろう。

ここで各グループの2項目の関係性に注目したい。まず、「全体の印象」が4点を越えているグループは4グループ(1、3、9、10班)あるが、そのグループ内の3グループが、「グループ活動」においても、4点を越えていることがわかる。その一方で、「全体の印象」が2点台の3つのグループ(2、7、12班)は、「グループ活動」においても2.1~3.3点という値が出ている。この結果は、グループ活動が発表全体の印象と深く関係していることを表しているのではないだろうか。つまりグループ活動が概ね満足にできたグループは、総じてその気持ちが発表全体への充実感へと繋がっていき、グループ活動がうまく行えなかったグループは、発表全体の印象に関しても低い数値が出てしまうのである。中には、「グループ活動」が2.8点で、「全体の評価」が3.7点というグループ(8班)もあるが、「グループ活動」の評価が高いグループに、「全体の印象」が低評価になっているグループがないことから、グループ活動の充実が、全体の印象に大きな影響を与えているといえるだろう。

では、「全体の印象」及び「グループ活動」に関して、各グループでの自己評価に差が生じた要因を、各グループの記述内容を基に考察していきたい。各グループの記述を見ると、共通したキーワードが見えてくる。それは一人ひとりの役割や意見を尊重する「協調」と、力を合わせて物事に取り組む「協力」である。両項目が4点を越えている3つのグループ(3、9、10班)の具体的な記述の中には、「準備の時から一人ひとりが役割分担をして取り組み、グループで何度も練習した。振り付けも皆でそろうように練習したり、グループでいい活動ができた。「こうしたらいい」とか「こうしよう」とも言い合っていたから、この班で良かったと思うし、楽しかった」(3班)、や「役割

表1 「全体の印象」及び「グループ活動」に対する各グループの平均値

班	全体の印象	グループ活動
1	4	3.6
2	2.5	3.3
3	4.2	4.1
4	3.2	3.4
5	3.7	4.2
6	3.1	3.3
7	2.5	2.1
8	3.7	2.8
9	4.2	4.2
10	4.3	4.1
11	3.1	3.7
12	2.5	3.2
平均	3.4	3.5

※小数点第二位以下は切り捨て

分担しながらも大道具とかをしたけれど、皆で案を出したり考えたりして、協力性のある動きができた」といったものがあつた。このような記述からは、複数人と活動する難しさも窺えるが、話し合いなどによって、そのような困難さを乗り越えたからこそ、最終的に他者を尊重したり、互いに助け合う関係性が生まれ、充実した活動を行えたことがわかる。一方で両項目もしくは片方の項目が2点台のグループでは「全員で協力すれば、もっといいものができたと思う。初めて喋った子どももいて、グループがさらに二つに分かれてしまっていて、協力すべきだと思った」(7班)や、「全体としては練習から本番に至るまで、頑張ってきた作品で良かった。だが、活動(作業)をするうえで手伝うことなく非協力的な人がいたので残念でした」(8班)といった記述が見られた。これらの記述からは、コミュニケーションの不足や、課題に対する姿勢の差異により、協調、協力がグループ内でできておらず、その結果が発表の出来や、自身の充実度を左右したことがわかる。

以上から、「全体の印象」を評価する際には「グループ活動」の充実感が深く関わっており、その充実感をもたらす要因の一つは“協調”や“協力”といった、人との関わりが十分に実行できたか否かである。

ただ、これらの評価が、結果的な作品の完成度に直結しているかといえば、そうではない。上述の二項目に関する評価は、客観的な基準を詳細に示していたわけではなく、個々の学生の主観による評価である。そのため、学生の評価と担当教員が受けた印象に、差異が生じていた部分もある。というのも、発表に関して教員の評価が比較的高かった作品は、1、3、5、6、10班であつた。「表1」の結果が作品の完成度と直結しているのであれば、「全体の印象」が平均値を超えている8班や、両項目が4点台の9班の教員側からは高評価のはずであるし、6班に関しては、二項目の値で現状より高い結果が出るはずである。このことから、教員側の評価と、「全体の印象」(達成度)及び「グループ活動」(充実度)が必ずしも一致しないことがわかる。ただ、教員側が低評価をつけた班が、2、4、7、12班であつたことから、完成度の低い作品に関しては、自他共にその評価が一致していた。

調査以前は、学生の充実感や達成感が増せば、作品の完成度を上げることができるのではと予測していた。ただ、創作活動や発表時の様子を見ると、とりあえず作品を完成させ、発表できればよいというような消極的な意識で、満足しているような班もあつた。つまり、グループ活動中に問題は生じたが最終的には全員で楽しく発表できたので、「楽しかった」「良かった」という自己完結的な感情が根底にあるのではないだろうか。これらの学生の意識を上げ、オペレッタ創作活動に意欲を持って臨めるようにするには、活動の動機付けやねらいの具体的な説明、活動毎の目標設定や教員の援助など、学生が活動内容をイメージし易く、目に見える形で提示することが必要ではないだろうか。さらに、学生がグループ内で、受容的な雰囲気の中で活動できるように活動への直接的援助や毎時記入させている活動日誌から汲み取れる課題への間接的援助も重要である。

(2)「グループ活動」の記述内容からみる課題

前項で“協調”と“協力”が「グループ活動」を充実させる背景にあると述べたが、具体的に学

生たちは如何なる問題と直面していたのだろうか。

グループ活動を記述した文面を見ると、一連の活動に対するネガティブなもの、逆にそれらをポジティブに、肯定的に捉えたもの、また、課題や反省などを記したものがあつた。本研究ではそれらを順に、「否定的表現」、「肯定的表現」、「課題」に分類した。さらに、それらの文面に出てきたキーワードを抽出し、「コミュニケーション」、「役割」、「計画・準備」、「充実」、「心情」という5項目に分類したものが表2である。

表2 グループ活動の記述内容の分析

項目	否定的表現 (件数)	肯定的表現 (件数)	課題 (件数)	合計
コミュニケーション	19	68	8	95
役割	0	7	2	9
計画・準備	10	7	16	33
充実	0	10	0	10
心情	0	3	0	3
合計	29	95	26	150

表2を見ると、「肯定的表現」が「否定的表現」に比べ、3倍ほど多く記述されており、グループ活動に対して学生が肯定的な意識を持っていることがわかる。また、「課題」を含めた3項目で多く見られたのが、「コミュニケーション」に関する記述である。特に「肯定的表現」に関しては、「充実」、「役割」、「計画・準備」なども焦点となっていたものの、「コミュニケーション」に関する記述が圧倒的に多かった。一方で、「否定的表現」では「計画・準備」に関する記述も「コミュニケーション」に次いで多く見られた。また「課題」として最も多く挙げられていた項目は、「計画・準備」であった。この結果からグループ活動の運営では「コミュニケーション」が大きな柱になると学生が捉えていることがわかる。

表1で示したように、「グループ活動」の平均値は3、5、9、10班が4点を越えていた。これらの班の記述内容を見てみると、「否定的表現」については、3班は1件、5班は0件、9班は2件、10班は0件であり、肯定的にグループ活動を捉えた学生が多かった。最も教員の作品評価が高かった3班は、3クラス混合のグループであったが、この班は、他授業内外で交流のある学生同士がグループを組んだものと思われる。異クラス合同であるにも関わらず、前述のように「グループ活動」に対する「否定的表現」は1件であり、「皆で協力してできた」、「役割分担をしてスムーズに活動を進められた」という「肯定的表現」が多く見られた。さらに、「チームワークがあつた」や「団結力が深まつた」といった記述からも、お互いに意見を出し合いながら、自分の役割や責任を果たして作品に取り組んだことが窺える。

また、5班の記述でも「皆で協力できて良かった」「班長を中心として、皆で助け合いながらでき、とても良かった」といった“協調”“協力”ができたという意見が見られた。この班も3班と同じく、異クラスの者同士がグループを組んでいたが、班長の行動力がグループ運営にプラスに働いたと考

えられる。というのも、この班が公共施設との連携イベントに参加することになり、本番前日に予行を行った際、作品の完成度を上げるために小道具の追加を助言した。翌日が本番ということもあり、難題を強いたかと思ったが、本番では手作りの小道具を増やし、予行より高い完成度で演じることができていた。活動中にも班長の行動力や温かな性格が、グループを良い方向に導いていることは感じていたが、それを再認識させられる出来事であった。班員は、このような班長の責任感ある言動により、創作意欲を高め、団結力を深めていったのではないだろうか。

上述のような互いに“協調”“協力”しながら、団結していたグループがある一方で、グループ活動の評価点が低かった7班、8班を始め、問題に直面していた班も多かった。7班の記述内容を見ると、「否定的表現」として「異なるクラスの合同は、馴染むのに時間がかかった」「全くまとまらず、活動が進まなかった」「チームワークがとれていなかった」など、グループの協力以前の問題を抱えていたことがわかる。この班は、教員が人数調整を行い、異クラスで組まざるを得なかったため、不満を持つ学生が出てきたのだろう。しかし、「後半は良かった」「もっと初めから協力して動いていたら良かった」などの記述が示すように、発表が近づくにつれて、少しずつ協力し合う姿勢が生じていたことが窺える。

7班のように異クラスのグループ編成ではないものの、問題を抱えていた班もあった。1班は、同クラスで構成され、最も人数が多い班（14名）であり、その人数が故に、創作や作品に対する意識や取り組み姿勢などに個人差がある班であった。活動中にもそれらに関する悩みを相談されることもあったが、そのような蟠りが「皆が皆、考えを変えず、貫こうとして揉めた」「協力する時としない時の差があった」などの記述に表れていた。また、「動き出したり、練習する遅さもあった」という記述からも、大人数が故にリーダーによる統率が十分にとれず、その結果がグループの輪を乱すことに繋がったと考えられる。この班の「揉めたが最後には全員の気持ちが一つになった」「喧嘩したが、話し合って解決し、力を合わせて活動した」などという「肯定的表現」の記述から、他授業でもグループ活動をする際は、同メンバーで組むことが少なくなかったと推察される。しかしながら、このオペレッタ創作活動は、単にグループ編成の際に仲が良ければ成功するというわけではなく、長期的に協力し合わなければならない。特に、人数が増えると自ずと非協力的になる者も少なからずおり、そのような意識の低い者の行動が、その他の班員の士気や、作品の完成度に深く影響してくる。グループを運営する上で、適切な人数構成にする事もまた必要な条件と言える。

2班は、1班と同様、同クラスでの構成で、1班に次いで構成人数の多い班であった。記述内容をみると、「しっかりしている子としていない子が分かれていた」「全員で練習したのが、1・2回」といった「否定的表現」があることから、十分な統率がとれていなかったことがわかる。活動状況を振り返ると、集中して制作などに取り組んでいる者の傍で、非協力的な態度をとっている者も見られた。グループは同クラスで編成されていたということもあり、表面的には大きなトラブルが生じていない反面、最後まで提出物が滞るなどの問題が生じ、各自の役割や責任に対する認識が希薄であったと考えられる。班長と成員の関係は悪くなかったのかもしれないが、統括者が不在で、

役割への認識が曖昧であり、責任感を持った者が自発的に活動に取り組む他ないような状態であった。

以上、いくつかのグループの具体的な活動記述を基に考察を行った。本項の冒頭でも述べたように、グループ活動に関しては肯定、否定に関わらず「コミュニケーション」に意識が向いている学生が多い。それは、2007年の調査¹⁾と同様である。ただ、「コミュニケーション」の問題が根底にはありながらも、人数構成や異クラスであるが故に生じる課題も垣間見えた。グループ編成は、全員が納得して、グループを組めるわけではなく、自ら発言しグループを組める者、周りの様子を窺って行動する者、教員の助けを待っている者など、個人の性質や交友関係が大きく反映される。適正な人数での構成や、統率力のあるリーダーの選出などは、互いにコミュニケーションを図る以前に、取り組むべき課題だと言えよう。

(3)「活動・発表」の記述内容からみる課題

表3は、「創作・発表を経験しての感想（自由記述）」の記述内容を、「修学（創作・発表）」、「創作内容」、「活動」、「人間関係」、「発表」、「作品鑑賞」、「活用」、「材料費」に分類したものである。「創作・発表」に「充実感」を味わったという記述が全記述中の18.7%（42件）と最も多く、次に「人間関係」の「連携・協力」（14.7%：33件）、「活動」の「計画・時間」（12.9%：29件）と続いた。「創作・発表」の「不安・困難」（5.8%：13件）の記述もあったが、「創作・発表」の「学び」と「充実感」の項目を合わせると、23.6%（53件）であったことから、学生が活動に意義を見出していたことがわかる。

「学び」や「充実感」の具体的な記述として、「オペレッタ創作は自分たちで台本を持ち寄って、子どもたちが喜ぶ内容や何を思っほしい、感じてほしいという思いを持って選んだり、背景・小物の工夫の仕方など学ぶことができた」（3班）、「普段の授業ではこのような経験ができないので、とても良い経験だったと思う」（3班）とあった。これらの記述内容は、具体的に学んだことや経験の重要性を記しており、「表1」の結果と同様に「グループ活動の充実度」が高かったことを示している。

また、創作活動に「不安・困難」を感じている記述としては、「何から何まで自分たちで考えて、どこまでできるか不安だった」（2班）、「一から自分たちで作っていくのは、とても難しかった」（7

表3 「創作・発表を経験しての感想」の分析

項目	具体的な項目	件数
修学（創作・発表）	学び	11
	充実感	42
	不安・困難	13
創作内容	構成・台本	4
	台詞	9
	音楽	12
	造形	0
	衣装	1
	動き・ダンス	1
活動	計画・時間	29
	練習	17
	姿勢	0
人間関係	人数	2
	連携・協力	33
	リーダーシップ	3
発表		21
作品鑑賞		10
活用		15
材料費		1
合計		224

班) などがあつた。学生にとっては、初めてオペレッタ創作に取り組み、その創作過程や到達目標がシミュレーションしにくいなど不安を抱え、試行錯誤の活動であつたことが窺える。本校では他の授業や学園祭などでグループを組み、作品を創って発表する機会は多々あるが、2カ月余りかけて行う長期的活動は少なく、具体的にどのように取り組めば効率よく進めることができるのかが捉えにくいのではないだろうか。これらの「不安」は、「活動」の項目の「計画・時間」や「練習」の記述にも表れている。

先述したように、2番目に多かった項目として、「人間関係」の「連携・協力」(14.7%) が挙げられる。具体的な記述として「多数の人と協力して、一つの作品を成功させるのでとても大変な部分もあったけれど、今回のように一人ひとりができることをフォローし合うと、とてもいい作品ができたと思う」(5班)、「文化祭でも感じたけど、グループ活動というのは難しいなと思ったし、その中で妥協点を見つけていくのも難しかったなと感じた」(6班)とあつた。これらの記述内容は、(2)の結果と同様に、他者と協力・連携することで目的に到達することができると思ふことがわかる。また、グループ活動を経験しながら、成員同士が互いの言動を受容・共感することの難しさも感じていたことが窺える。

「人数」(2件)や「リーダーシップ」(3件)の具体的な記述は少数であつた。「人数」の具体的な記述として「人数が多い分、助かった面と大変だった面もあった」、「人数が多いほど一人ひとりの思いが違い、揉めごとになり、不安でいっぱいだった」(1班)とあつた。そして、「リーダーシップ」の具体的な記述は、リーダーの立場で「初めて台本を考えたり、上に立って物事を決めたりした。すごく難しく、うまくいかず、皆に協力してもらって作品を作ることができた」(5班)やメンバーの立場で「台本からすべて班長はすごく大変だったと思う」(5班)、「誰かが仕切ってテキパキすることで回りもスムーズにいくのだと気付いた」(7班)などという記述があつた。グループ活動を成功させるためには、適正な人数やリーダーの統制力なども必須の条件である。グループの人数が多いほど、皆の意見をまとめるのが難しく、参加意識が低くなる傾向がみられる。強烈なリーダーシップを発揮することができるリーダーであれば、活動自体は前進するかもしれないが、他のメンバーの参加意欲は低下し、充実感や満足感を得られにくい状況にもなる。また、責任感のあるリーダーほど、多様な問題を抱え込むことによる、精神的な負担が少なくない。

この創作活動は、台本係、音楽係、造形係、動き・ダンス係などの各係でリーダーを選出し、彼女らが中心となってアイデアを出し、具体的な制作は全員で行うように指示している。しかしながら、学生がこれらの役割・分担の意義を認識して、有効に活動しているかは疑問である。前述のようにリーダー(班長)が他の係をいくつも兼任していたという実態もあつた。リーダーを筆頭にサブリーダー及び各係のリーダーの連携作業が円滑に進むような活動運営の支援体制づくりやリーダー育成も大きな課題である。昨今の傾向として、目立つことや責任を求められることを敬遠する傾向が様々な活動の場面でみられる。班をまとめて、成果を上げるといった責任を伴うことを回避しようとする学生が多いのである。グループ分けの状況を見ると、普段交流があるのか訝しい学生が、比較的

活動に積極的なメンバーのいる班に加わる場合もある。しかし、活動に参加しているというよりは、傍観していることが多い。このように多様な班がある中で、リーダーに求められる資質の検討を含めたリーダー育成は課題の一つである。リーダーの自己犠牲のもとで活動が成り立ったとしても、それではグループ活動の意味はない。様々な場で、メンバーが個々の役割を自覚し責任を持って、能動的に活動に参加し、一つひとつ実績を目に見える形にしていくことで相乗効果が表れ、活動への意欲が高まっていく。つまり、グループ活動の意義を実感できるよう多様な場の提供を積み重ねていくことが重要なのである。そのなかで、活動の軌道修正をしながら、目的に舵をきるのがリーダーの役割である。目標を予測すること、先を見通す目は、保育者や社会に出ても求められることである。リーダーの育成と共に、多様な役割を体験することができる学習の場の提供は必要不可欠である。

先述したように「活動」の「計画・時間」に関する記述が12.9%あった。この項目は、(表2)においても記述が多かった項目である。具体的な記述内容としては「ぎりぎりになってもそれなりの作品しかできないということが分かった。もっと前以てしないといけないことを学べてよかったと思った」(1班)、「時間があるように思ったが、きちんと逆算して、この日まで何をしなければならないかを考えるべきだったと思った。時間に余裕を持って活動できれば、完成度ももっと上がって素晴らしい出来になったと思う」(2班)とあった。特に限定された期間の活動において、示された目標を達成するためには時間の効率化や綿密な計画を立てることが必須である。そして、創作活動はメンバーの協力・連携がないと成立しない活動であり、そのためにはメンバー同士の活動に対する意識の共有化を図ることが必要である。学生が活動に対しての目標や実施内容・方法などを具体的にシミュレーションして取り組めるように、授業毎の到達目標を示すことや目標達成するための援助も担当教員に求められる。さらに、学生一人ひとりの言動を注視しながら、グループ活動が建設的な運営になるように支援することも担当教員に求められることであろう。

「発表」に関する具体的記述は9.3%あり、「いろいろな班の発表を観ることで良いところ、悪いところを見て評価し、今後へとつながるのでやって良かったと思う」(1班)、「他の班の発表を観て、真似してみたいところをたくさん見つけることができ、良い学びができて良かった。もっといろいろなオペレッタもしてみたいと思った」(5班)、「皆の前で発表することがあまりないので、良い経験になって良かったと思う」(6班)とあった。オペレッタ創作活動は、作品を創るだけではなく、その成果を発表することも目的の一つとして掲げている。舞台上で発表することや他作品の鑑賞を通して自・他作品の振り返りを行うことができる。発表後、映像で自・他作品を観る時間を設けているので、それらの良い点や改善点などを客観的に分析することができ、更なる気づき・学びを深めることに繋がる。これらの気づき・学びは、作品に関することだけではなく、自己や他者に対する認識や存在を改めて受容することにつながり、人間関係を形成していく一助になる。将来、保育職に就き、日常保育活動や生活発表会を行う際に、オペレッタ創作活動や舞台経験が、子どもたちの援助に生きていこう。

また、「作品鑑賞」での具体的記述としては「自分では声を大きくしているつもりでも実際、映

像を見ると思っていたより小さかった」(5班)、「自分を客観的に見たりするのも面白かった。実際自分たちがしているのを観ると、こんな感じだったのがよくわかった」(3班)というものがあつた。「発表」の項目で述べたように、映像で自作品を振り返ることで、作品のテーマ、全体の構成、大小道具・衣装・音楽・ダンスの妥当性や役の演じ方などを客観的に分析することができていた。

「活用」の具体的記述では、「自分たちが実際にオペレッタをすることにより、指導の仕方に生かせると思った。自分が先生になったら、今回皆でやったことも一人でしなくてはいけなくなるので、経験を生かせるようにしたい」(3班)、「来年からは実際の現場で、子どもたちのオペレッタを作っていくので、さらに細かくいろいろなことを構成したり工夫することが大切だなと感じた」(5班)とある。これらの記述から、オペレッタ創作活動のねらいの一つである「保育現場への応用」ということを視野に入れて活動を振り返れたことがわかる。創作活動に能動的に取り組んだ学生は、気づきや学びを多様に得ることができるが、受動的な学生は活動自体に意義を見出せないまま嫌悪感を抱えて終わるのではないだろうか。

筆者は先行研究において、2009年度の卒業生対象にオペレッタ創作活動に関する調査を行った。「授業内容の活用の有無」の項目をみると、回答率は低かつたが、「劇遊びでは授業で学んだ事柄全てを生かせた」や「台本の作成、BGM作り、子どものダンスづくりなどに生かせた」とある²⁾。保育現場に就いている卒業生が来校した折、生活発表会に関する話になると決まって、「オペレッタ創作活動をもっと頑張つてやればよかつた」と後悔の念を口にすることや、「後輩にもしっかりやるように伝えて欲しい」と話すことがある。このような現場の声があることから、保育現場でのニーズに対応できるように創作活動の充実度や作品の質を高めていくことが求められている。

「創作・発表を経験しての感想」を通して見えてきた課題としては、創作に対する不安・困難さの解消、活動内容の明確化、グループ活動の建設的な運営方法、教員の働きかけなどが挙げられる。学生が創作活動や発表を通して、多様な学びを得たことが記述内容から確認されたので、さらなるグループ活動が充実を目指し、これらの課題を検討していきたい。

(4)「全体の印象」と「グループ活動」、「活動・発表」の調査を通して

今回の調査目的は、グループ活動の実態を把握し、グループ活動の充実度を高めるための対策を探求することにあつた。実際に学生の記述内容をみると、「集団で活動すること」の困難さが窺え、その要因として「協力・連携」「コミュニケーション」の課題が浮かび上がつてきた。関連する記述として「グループで衝突することがあつても互いに妥協点を見つけて活動に取り組んだ」といったものがあり、集団で活動することで生じる困難さを乗り越えようとする姿勢を見出すことができる。その反面、トラブルを避けているのか、お互いに話し合うこともなく、とりあえず、目の前のやるべきことをやろう、という姿勢の記述もあつた。普段、話したこともない学生同士でグループを組むと、関わろうという意思が感じられないという、活動以前の問題が起こる。また、学生の様子を見ると無関心を装いながらも、相手の出方を窺つたりしながら自分はどう動いたらよいのか、立ち

位置を模索している様子が伝わってくる。活動後、「オペレッタ活動をしたので友人関係が悪くなった」と言う学生もいる。2カ月間共に活動し、これまでとは違う友だちの言動に接して、不信感を募らせた結果、このような発言となったのであろう。

また、「このチームでできて、1人ひとりの長所や特技を知れるきっかけになった」という記述があったが、グループ内でお互いを尊重し、受容的雰囲気生まれれば、個々人が自らの気持ちや考えを素直に表現することができる。これらが人間関係を円滑にすることに繋がり、グループ活動の充実度を高めることになる。

先述したように、創作活動に取り組む姿勢に温度差があることは記述内容から読み取れる。また、グループの成員一人ひとりが目的に沿った言動を示すことで、グループ内の相乗効果を高めることができ、創作活動が充実してくると述べた。しかしながら、創作活動に非協力的な学生が存在するとそれが他のメンバーの不満を募らせ、やる気を削ぐことにつながり、グループの調和に悪影響を及ぼしかねない。

創作活動に消極的な要因としては、保育者資格を取得するための必須科目のため履修する、グループ活動は苦手だからやりたくない、創作活動自体に魅力を感じない、といったものが考えられる。これらの要因を軽減させるには、オペレッタ創作活動の動機付け、学生がグループ活動を通して快の感情や成功体験などが味わえるような場の提供・援助することが挙げられる。例えば、衣装や道具を皆で作ることによる満足感や、皆で踊るダンスを考案し、その動きが揃うなど、メンバーが共有して達成感を味わえるような成功体験が仲間意識を醸成するのではないだろうか。しかしながら、活動状況を見ると、一人ひとりが自分の力を存分に発揮していないのが実情である。この活動は、創作活動であることや保育現場への応用力を培うことをねらいとしているため、学生が、既成の模倣から新たに創っていくという意識や創造力、表現力を高めていけるように教員の教材研究や支援体制を考えていきたい。

3項目の調査結果から、発表の達成度を高めるためには、グループ活動の充実度が欠かせないことが認識できたが、学生がグループ活動に対する嫌悪感を抱くことなく取り組むための対策を考えたい。

4 より充実したグループ活動を行うための提案

ここまでの考察を踏まえ、我々は教員として、学生が直面している課題に対して如何なる対策を講じることができるのだろうか。様々な課題がある中で、ここではグループ運営に直結する、コミュニケーション不足の解消、有効的な時間の利用方法について検討していきたい。

まず、最も大きな課題であると思われる相互コミュニケーションについてだが、オペレッタに取り掛かる前に、アイスブレイクのための様々なグループアクティビティの時間を設けることも一つの策といえる。今回、コミュニケーション不足の要因として、各グループが、取り組み姿勢の有無

によって更に個々のグループに細分化されることや、クラスが異なっていることで面識のない者同士が同グループになることが挙げられた。もちろん、そのような場合であっても、相手に自らの思いを伝えることができれば、コミュニケーション不足には陥らないのだが、今日の人見知り傾向である学生にとっては、そういった状況を打開することはいささか困難である。よって、ゲーム感覚で楽しみながらお互いの考えを知り、自分の思いを発言できるグループアクティビティには、グループワークの前段階として一定の効果が期待できるのではないだろうか。

また、時間の有効利用については、より綿密な計画と目標設定が可能なワークシートの活用が考えられる。本授業では本時の目標と感想、そして次回の目標が記入できる活動日誌を使用してきた。しかし、学生は次回の活動予定については把握していても、全体を通しての進行状況を把握することはできないでいた。それにより、目の前のことだけに意識をとられてしまい、結果として不十分な個所が見える完成度の低い作品になってしまうグループもあった。そのようなグループを減らすためにも、本番までのそれぞれの役割がシミュレーションでき、実際の進行状況と照らし合わせることで現状が把握できるようなワークシートを作成させることが必要なのではないだろうか。シミュレーションした予定を仮に「理想」とするならば、学生は、理想と現状を比べることができるため、制作や練習のペースを合わせていき易くなるだろう。

以上、現状の課題に対する策を提案したが、何れも教員の学生に対するサポートや的確な授業構成があって初めて成り立つと言ってよい。アクティビティの選択や実施方法、学生の進捗状況に対する助言など、教員の対応次第でその場の雰囲気や学生の取り組み姿勢が大きく左右される。上述の改善策を検討すると同時に、教員としても十分な教材研究と、リアルタイムで生じる問題に対応できる力を培っておくことが不可欠である。

5 まとめ

今回の調査結果から、グループ活動の充実度が作品の完成度に影響していることを改めて確認できた。そして、グループ活動の充実度には“協調”や“協力”が欠かせないということやこれらを培うには、コミュニケーション能力を高めることが重要であることが理解できた。元保育士から、子どもを取り巻く環境（社会）の変化で、保育現場では集団活動がしにくくなっているという話を聞いたことがある。このことから、本校は対人援助職の養成校であることを踏まえ、1年次の段階から、他授業との連携を視野に入れて、コミュニケーションを深めることができるカリキュラム編成、例えば、レクリエーションを学べる科目を取り入れることも考えられる。入学直後の初段階で人間交流を深めることができる教科を取り入れることは、他教科でグループ活動が行われている現状を考えるとプラスに作用するだろう。グループ活動が学生主導で運営できない状況が増加する中で、前章での提案を積極的に検討することが重要である。

また、保育現場でのオペレッタ・劇の実態やニーズを把握し、これらに応えられるように学生の

知識や技術を向上させるためには、教員の教材研究も必須である。学生が保育者になった際、日常保育や発表会でオペレッタ創作活動での学びを十分に生かしていけるように教材研究を深めることが必要だろう。

今回の結果を受けて、今後はグループ活動の充実度を高めるために、学生がグループ活動に対して如何なる意識を持っているのか等についても考察していきたい。

注記

- 1) 魚住美智子・林和美・田中千恵. 大阪城南女子短期大学研究紀要 第41巻「オペレッタ創作活動による表現力の育成と保育への応用Ⅲ」2009年

引用

- 2) 魚住美智子・江原千恵・林和美. 大阪城南女子短期大学研究紀要 第45巻「オペレッタ創作活動における表現力の育成と保育への応用Ⅶ」2010年

(うおずみ みちこ：教授)

(むらかみ ゆうすけ：講師)